

(1) 「この家は小人のじいさんと女の子だ。どつちから片づけようか」光にのって来た原子人間 ブラックバードは考えていましたが、「よしッ、小人から先にしよう」

(2) 小人ハカセは一心に本をよんでいました。バードがコツコツときかいのドアをたたくと、「だれじやな、ミドリかい? 何か用かね、あけておはいり」

(3) 「あ: 君は」「オレは原子人間だ。小人じいい、かくごしろ」「ほほう、おそろしいことをいうね。まあおはいり」「うぬッ」とバードは、短剣をひきぬいて、

(4) 「かくごしろ: あツ、ウーン」小人老人の体から、何のしけかデンパのようなものが出て、近寄るバードはピリピリとしごれます。「どうしたね、原子人間くん」

(5) 「仕方がない。こいつだ」元のヘヤにとつてかえすと、ブラックバードはミドリをつかまえました。「あーッ、先生!」「来い:」

(6) ヒュー、パパーッ。山の小人ハカセの小屋から、ブラックバードはひとすじの光になつてミドリをかかえてとびさりました。

(7) 「しまつた、わしはデンパイスに坐っていたから原子人間が近寄れずに助かつたが、あの少女をさらわれた。よーし、助けにいつてやろう」

(8) そばのスイッチをスッと押すとジジー、ジー、ゴー この小屋の地面がふたつにわれて、中から空飛ぶキューが出てきます。

(9) 「これにのつて原子人間をついせきするのだ」小人ハカセは空とぶキューにのりました。キューはたちまち

(10) 大空にうかびあがりました。ヒュー、ゴゴー、ケルルルーン。と、海の方へどんでいきます。

(11) そのころ、海の中のハナレ小島のブラックバードのそくつでは、電気ジシャクにすいつけられてうごけぬロボット太郎と、とらえられたミドリを前にして

(12) ブラックバードがトクイになつて「やい、お前はあの小人ハカセのマゴか、それともデシ
か、いえ」「しりません」「何、知らない。おれをバカにするとひどい目にあわせるぞ」